西郷隆盛と霧島 その3

西郷と肖像画

今年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年となる節目の年です。

西郷隆盛は晩年、日当山をよく訪れ、温泉や狩猟を楽しみました。そのため、霧島市には西郷ゆかりの品物や逸話が多く残っています。

国分郷土館には西郷隆盛の狩りの様子を描いた肖像画「南洲翁狩姿」があります。今回は西郷と肖像画について紹介します。

西郷どんは写真嫌い？

西郷隆盛の肖像画といえば、イタリアの銅版画家・エドアルド・キヨッソーネが描いたものが有名です。これは西郷が亡くなった翌年に、西郷を知る人から聞いた特徴や、弟の西郷従道、従弟の大山巌の写真を参考に描いたとされています。ちなみに、キヨッソーネは紙幣や印紙、切手などの印刷技術を指導するために来日していました。

ここで疑問が生じます。なぜ、従道や大山の写真を参考にしたのでしょうか。実は、西郷隆盛を写した写真は一枚も残っていません。その理由については、次のような説があります。

- 暗殺を防ぐため人相を隠した
- 写真を撮られるのが嫌い、怖かった
- 死後、西郷を伝説化するために写真を処分した

キヨッソーネが描いた肖像画
（西郷南洲顕彰館蔵）

服部英龍が描いた肖像画
（国分郷土館蔵）

西郷公園の西郷像

西郷隆盛の写真嫌いは有名だったようで、明治天皇が「西郷の写真が欲しい」と要望されても撮影を拒んだという逸話が残っているほどです。

また、明治初頭の写真といえば、非常に高価な上、五～六分間静止していなければなりませんでした。さらに「魂を抜かれる」といった風評もあり、当時の人々からは敬遠されたこともあったようです。

服部英龍が描いた肖像画

国分郷土館には、服部英龍が描いた「南洲翁狩姿」があります。

服部英龍は、※1国分中馬場の出身で、西郷と直接会った絵師の一人とされています。英龍が描く西郷の肖像画は、都城島津家のお抱え絵師・中原南渓の絵を模写したのではないかともいわれています。

美人画を得意とした英龍。肖像画の特徴としては、豪快な筆運びの中にも、西郷の毛髪などは繊細なタッチで描写されています。

ちなみに東京の上野にある西郷像は、顔はキヨッソーネで、着物姿は服部英龍の絵を参考にしたといわれています。

西郷公園の西郷像

鹿児島空港正面にある西郷公園内に建立している西郷像は、佐賀県出身の彫刻家・古賀忠雄氏が制作しました。当初は西郷隆盛没後百年事業として京都に建立される予定でした。しかし計画が変更され、富山県高岡市に置かれていた西郷像を溝辺町の有志の尽力で移送し、昭和六三（一九八八）年に西郷公園として整備されました。

西郷公園の西郷像は人物像としては日本一の大きさを誇り（十・五メートル）、袴姿で腕を組み、泰然とした姿で東の方角を向いて立っています。

いずれにしても西郷隆盛の肖像画や西郷像に共通しているのは、眉毛が濃く、大きな眼で正面をじっと見て、一文字に引き締まった唇をしているところです。

それは、泰然とした態度で万象を見据え、あらゆる人事や出来事を抱え込む懐の大きさと、何事にも動じない意志の強さを感じます。まさに「西郷どん」は、そのような人だったのではないでしょうか。

（文責＝鈴）

※1　国分中央三丁目